全国大学国語国文学会 第一〇六回大会案内・要旨集

会場 中京大学 (土)・二十五日(日)

後援 中日新聞社

協力

徳川美術館

平成二十四年度冬季

全国大学国語国文学会 第一〇六回大会案内

会場 中京大学

〒466—866 名古屋市昭和区八事本町一〇一一二

電話 〇五二—八三五—七三一四 (原國人研究室)

Eメール khara@lets.chukyo-u.ac.jp

○同封の葉書に出・欠をご記入の上、十一月五日 (月) までに必ず着くようにご返送ください (**ご欠席の場合も必ずご返送をお願いします**)。

○十一月二十四日(土)の、昼食代(一、○○○円/委員のみ)、懇親会費(一般七、○○○円、大学院生四、○○○円)、レジュメ資料代 (一、○○○円)、十一月二十五月(日)の昼食代(一、○○○円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/○○八一○─九─二○五一一八、

口座名称/原國人研究室)にて十一月五日(月)までにお振り込みください。

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、 左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒24-868 横浜市泉区緑園四-五-三

フェリス女学院大学文学部日本文学科竹内研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.ferris2012@gmail.com

FAX ○四五一三三○一六○六七

《交通》

地下鉄 鶴舞線・名城線 八事駅 五番出口すぐ

第一日 平成二十四年十一月二十四日(土) 中京大学名古屋キャンパス

委 任 委 員 員会(11時00分~11時30分) 会議棟 中会議室

会(11時30分~12時30分) 会議棟 大会議室

大 会

受付 13時00分~

開会 13 時 30 分

会場 四号館四一二教室

開会の辞

会長挨拶 会場校挨拶

公開シンポジウム (13時40分~17時30分)

テーマ「継承と断絶―創造のための―」

総合司会/本学会常任委員・中京大学教授

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

原

國 人

北川 中西 薫 進

中京大学学長

パネリスト

徳川美術館副館長 佐山 四辻

元小学館編集者

辰夫 秀紀

新編日本古典文学全集を編集して

『好色一代男』の検閲をめぐって―明治・大正期を中心に―

コーディネーター

中京大学教授

尾張徳川家はどのようにして文化を継承してきたか

中京大学教授 浅岡

酒井 邦雄 敏

懇親会 (18時~20時)

中京大学ヤマテホール(センタービル二階)

会費 一般 七、〇〇〇円 大学院生 四、〇〇〇円

研究発表会 会場 五号館五七一教室

午前の部(9時30分~12時10分)

総合司会/本学会常任委員・成城大学教授

なき人の〈かたみ〉考―『源氏物語』早蕨巻の贈答歌をめぐって―

発表者/愛知淑徳大学助教

亀田

夕佳

井野

葉子

山田

直巳

司 会/青山学院大学非常勤講師

『狭衣物語』「燃えわたる」の歌をめぐって―源氏の宮の美がもたらすもの―

発表者/國學院大學大学院生

太田美知子

高橋

由記

司 会/大妻女子大学非常勤講師

室町時代の堺と大徳寺派禅僧―『自戒集』にみる語彙と比喩―

発表者/堺市博物館学芸員

司 会/東京大学名誉教授

|藪の中」は供述調書か―〈語りの場〉を横断する読者―|

発表者/中京大学非常勤講師

髙塚

雅

細川

正義

司 会/関西学院大学教授

昼食·休憩 (12時10分~13時10分)

午後の部(13時10分~15時50分)

萩原朔太郎『月に吠える』の削除に関する事情について―内閲がもたらした影響―

総合司会/本学会常任委員・大分大学准教授

発表者/日本学術振興会特別研究員

藤原

耕作

牧義之

矢内

洋 一 磨

三角

司 会/関西学院大学教授

細川 正義

川端康成と綴方―川端の文学観を探って―

発表者/名古屋大学大学院生

司 会/専修大学教授

山 口

政幸 晨

「読むこと」と「読まれること」―川端康成『無言』論―

発表者/早稲田大学大学院生

東雲かやの

山 口

政幸

司 会/専修大学教授

発表者/愛知県知多翔洋高等学校教諭

歴史小説としての『なまみこ物語』

司 会/富山大学教授

本大会実行委員長/本学常任委員/中京大学教授

原

國 人

研究発表奨励賞

授

賞式

(15時50分~16時00分)

五号館五七一教室

閉会の辞

中京大学図書館蔵貴重書の展覧

会 場 中京大学名古屋キャンパス

期 間 十一月二十四日 (土) 10時30分~16時30分 / 十一月二十五日(日)9時30分~16時00分

センタービル三階 ○三○四教室

- 5 -

増 田

祐希 幸代

金 子

平成二十四年度冬季

全国大学国語国文学会 第一〇六回大会 公開シンポジウム

継承と断絶―創造のための―

今、グローバル化の中の日本で古典の位置づけは確かなものと言えるのでしょうか。新しい創造のために、 たちが今しなければならないことは何なのでしょうか。ここ中京の地において、全国に発信します。 のエートスによって、保護され継承されて来ました。近代に入っても、尾張徳川家の取り組みや古典を現代に再生するためのメデ ィアの努力などが数多くなされてきました。 文化創造の礎たる古典の継承が困難な状況はたしかにいつの時代にもありました。それでも、古典は先人の憧憬や努力、日本人 しかし、そうした営為を阻む障壁が立ちふさがったことも再三再四ありました。では、 国語国文学に携わる私

パネリスト

尾張徳川家はどのようにして文化を継承してきたか

新編日本古典文学全集を編集して

『好色一代男』の検閲をめぐって―明治・大正期を中心に―

元小学館編集者

徳川美術館副館長

四辻

秀紀

中京大学教授

佐山

辰夫

コーディネーター 中京大学教授

浅岡

邦雄

酒井 敏

【研究発表/午前】

なき人の〈かたみ〉考 ―『源氏物語』早蕨巻の贈答歌をめぐって―

愛知淑徳大学助教 亀田 夕佳

と中君との贈答歌について考察する。本発表では『源氏物語』早蕨巻の冒頭に描かれる、宇治の阿闍梨

である自らをいう表現だといえるのではないだろうか。早蕨巻の中君の返歌における「なき人のかたみ」は、八宮の「子」寄せる表現であることが指摘できる。こうした発想を踏まえたとき、と、「筐」を意味する場合は、「籠/こ/子」の連想をおのずと引きう表現だと解釈されてきた。しかし、歌ことば「かたみ」をたどるこれまで中君の返歌における「なき人のかたみ」は、八の宮をい

の意味を改めて考えたい。歌ことば「かたみ」の表現を取り上げることによって、中君の返

『狭衣物語』「

國學院大學大学院生 太田美知子

を見て狭衣が詠んだ歌、『狭衣物語』巻二において、雪で作った富士の山に煙を立てたの

とどう関わるのか、という二点を論じたい。
にどのような効果をもたらすのか、歌の煙のありようが物語の展開源氏の宮にかぐや姫のイメージを持たせることが、この場面の読みして位地づけられていることは従来指摘されているが、本稿では、この富士の山の煙は、『竹取物語』を想起させる一方で、竹取が描この富士の山の煙に託して、源氏の宮への恋慕の情を詠んでいる。は、富士の山の煙に託して、源氏の宮への恋慕の情を詠んでいる。燃えわたる我が身ぞ富士の山よたゞ雪にも消えず煙立ちつゝ

狭衣はこの歌を詠む前夜、女二の宮の残した枕の涙から、母皇太察する。
 森なはこの歌を詠む前夜、女二の宮の残した枕の涙から、母皇太后宮を亡くした女二の宮の悲しみの深さを知ったばかりである。これまで源氏の宮の美しさに感嘆する。続く地の文には、「かゝれば狭衣は源氏の宮の美しさに感嘆する。続く地の文には、「かゝれば狭衣は源氏の宮の美しさに感嘆する。続く地の文には、「かゝればたれまで源氏の宮の美しさに求めているのである。そこで、それまでの源氏の宮の影宮の美しさに求めているのである。そこで、それまでの源氏の宮の影宮の美しさに求めているのである。そこで、それまでの原因を、源氏の宮の美しさに求めているのである。そこで、それまでの源氏の宮の影宮の美しさに求めているのである。そこで、それまでの源氏の宮の影とがである。とれまで源氏の宮の美しさに対してが、のありようにから、一般などの宮の裏の残した枕の涙から、母皇太神ない。

ということを述べる。が狭衣を思うようになるまで、狭衣の思慕が続くことを示唆する、が狭衣を思うようになるまで、狭衣の思慕が続くことを示唆する、なる、三、「燃えわたる」の歌の富士の煙のありようは、源氏の宮帰結させようとする『狭衣物語』の論理が、読者に受容されやすく氏の宮をかぐや姫になぞらえることで、悲劇の原因を超越した美に、結論として、一、源氏の宮の造型は当初から変わらない、二、源

【研究発表/午前】

室町時代の堺と大徳寺派禅僧 ―『自戒集』にみる語彙と比喩

堺市博物館学芸員 矢内 一磨

野から、文化史学的に解明することを目的とする。教を指向した大徳寺派禅僧との交流の特性を文学と史学を超えた視において、新しく都市の運営の中核となった町衆と広く社会への布政治・経済・文化など多くの面で繁栄を誇った室町時代の都市堺

戒集』において激しく批判したことで知られる。 電町時代の堺では、当時の大徳寺主流派である養叟宗頤(一三七宮和)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が六~一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大~一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大多一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大多一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大多一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大多一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大多一四五八)と春浦宗熈(一四○九~一四九六)師弟による布教が大徳寺主流派である養叟宗頤(一三七字)といる。

しながら『自戒集』の詩・文は当時の大徳寺派禅僧による堺布教が著にあたる『狂雲集』に比べて評価される機会は少なかった。しか『自戒集』はその表現の苛烈さもあり、一休の思想を表出した主

が比喩するものを考察する。 戒集』の詩・文にみられる特徴的な語彙を検討することで、それらみむ問題点と特性を、比喩的にえぐりだしている。本発表では、『自

していく。 な単なる宗教的堕落にとどまらない文化事象であることを明らかにな単なる宗教的堕落にとどまらない文化事象であることを明らかにの堺と大徳寺派禅僧の交流の実態と特性が、従来言われていたよう善語彙の検討と比喩の考察を通じて『自戒集』が表現する室町時代

【研究発表/午前】

「藪の中」は供述調書か ―〈語りの場〉を横断する読者

中京大学非常勤講師 高塚 雅

のであるが、証言者(木樵り・旅法師・放免・媼)と当事者(多襄語り手と語りの受け手、及びその状況と位相差を考えることを指すとそれぞれの位相についての考察に主眼を置く。〈語りの場〉とは本発表では謎解きは行わず、当該テクストにおける〈語りの場〉

言及する。
「市民ケーン」(一九四一年)についてもこの視点よりウェルズの「市民ケーン」(一九四一年)についてもこの視点よりかれた立ち位置を考える上で重要な示唆を与えてくれるオーソン・照される黒沢明の「羅生門」(一九五〇年)と、読者(観客)の置くわえて、「藪の中」を考える際にその解釈の一つとしてよく参

日本学術振興会特別研究員 牧 義之

る。「「「二月」二十一日になつて突然発売禁止の内達を受けた」が、作者・朔太郎が刊行直後に発表した「風俗壊乱の詩とは何ぞ」であが禁止になったという定説があるが、その根拠になっているのは、部分に記されている。『月に吠える』に関しては、従来より、初版三頁より一○八頁)までを削除す。」という文言が、削除された頁意」「その筋の注意により、「愛憐」「恋を恋する人」の二篇(一○ 大正六年に刊行された、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』は、「注

年表や資料からも指摘出来る。 年表や資料からも指摘出来る。 「月に吠える」は、正式な禁止処のために内務省へ納本された、内交本(内務省交付本)の資料として、紙面の削除分ではなく、検閲官の事前検査(内閲)の結果として、紙面の削除に吠える」を例にして指摘する。『月に吠える』は、正式な禁止処に吠える』を例にして指摘する。『月に吠える』は、正式な禁止処の側面に着目し、そこに記された奥付の訂正や、検閲官による書を資料からも指摘出来る。

本された図書から、『月に吠える』に内閲が行われた可能性を指摘てはいなかったと考えられる。朔太郎及び関係者が残した言説や納という言葉で説明して文壇人が納得出来る程の運用は、未だ行われ無い措置であったが、『月に吠える』が刊行された時期には、「内閲」内閲は、大正六年頃から行われた(発表者の見解)、法的根拠が

【研究発表/午後】

川端康成と綴方 ―川端の文学観を探って―

名古屋大学大学院生 魏

の探偵」「花日記」などの多くの児童文学を創作した川端康成も、くの作家を魅了し、戦後まで児童文学に影響を与え続けた。「級長綴方運動」が行われた。この運動は時代とともに変化しながら、多り、生活を高める知性と意欲を育てていこうとする教育運動「生活的、生和初期から日本では、生活を綴らせることによって、生活を知

持つと考えられる。 特つと考えられる。 特つと考えられる。 は昭和十四年随筆「綴方について」を発表し、東京女子大戦前から戦後まで綴方に強いと高せていた。 を述べている。また、『模範綴方全集』や『赤とんぼ』の綴方欄な 学で「綴方の話」をタイトルに講演を行い、綴方についての考え方 学で「紹方の話」をタイトルに講演を行い、綴方についての考え方 との選者に携わるなど、直接に綴方の評価に取り組んでおり、自ら が、経方の話」をタイトルに講演を行い、経方についての考え方 とのと考えられる。

学の可能性も問い続けたのである。学のあり方、国語教育の役目だけではなく、文学の本質、新しい文付与したり、意味をもたせたりした。綴方を通して、川端は児童文響を受けているが、その受容にとどまらず、彼なりに綴方に使命を川端が綴方に関して、綴方運動の担い手となる鈴木三重吉の影

味と川端文学観との関係について検証を試みる。川端にとっての綴方の意味や役割を解明する。更に、その綴方の意する。それをふまえ、鈴木三重吉らの思想の影響を考察しながら、選評、小説を分析することで、川端が考えていた綴方の表象を抽出本報告はまず、川端の綴方に関する活動経歴を整理し、随筆、

【研究発表/午後

晨

「読むこと」と「読まれること」 ―川端康成『無言』

早稲田大学大学院生・関東国際高等学校教諭 東雲かやの

読まれること」を描いた小説として『無言』を再評価したい。の読める」の焦点化を通じて作品の構造を捉え直し、「読むこと/の読める」の焦点化を通じて作品の構造を捉え直し、「読むこと/の心霊学興味と重なるモチーフへの注目が作品の評価を規定してき娘・富子、鎌倉―逗子間のタクシーに出没する〈幽霊〉など、川端娘・富子、鎌倉―逗子間のタクシーに出没する〈幽霊〉など、川端を見舞うという筋であるが、明房の〈頭のなか〉を代弁してみせる作家である〈私〉が〈もう一語も言はな〉くなった先輩作家・明房作家である〈私〉が〈もう一語も言はな〉くなった先輩作家・明房作家である〈私〉が〈もう一語も言はな〉

「母の読める」は、精神を病んだ息子に〈白紙〉の原稿用紙を読 した母がいる。

を「書くこと」にすり替える自身の姿を〈悲惨の極み〉と評してい替えて読み上げる作家志望の母が描かれるが、その母は「読むこと」読める』(一九二九~一九三〇)との比較でより鮮明になる。『母のここに描かれる〈幸福〉の相対化は、川端康成の同名小説『母の

味を呈示するといえる。
者に委ねるべき、を信条とした川端の作品群を考える上で大きな意れること」をめぐる小説としての『無言』解釈は、自作の解釈は読にとっての「読まれること」に反転するだろう。「読むこと/読ますようだ。ここに曝される「読むこと」の内実は、作家の明房や〈私〉る。このまなざしは、「母の読める」の〈幸福〉の裏側をも見透か

歴史小説としての『なまみこ物語』【研究発表/午後】

愛知県知多翔洋高等学校教諭 増田 祐希

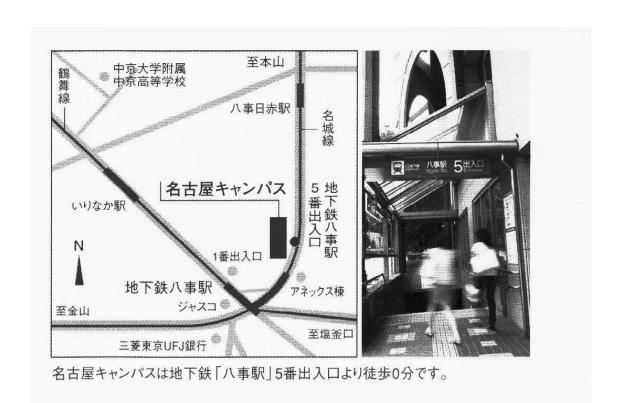
谷崎潤一郎の『春琴抄』を連想させるだろう。でいた。確かに架空の書物を中心に物語を進める手法は、多くの人々に自身はこの方法を「谷崎さんの小説のつくり方の真似」と称していの複雑な書かれ方について無条件に絶賛する声も少なくない。円地の複雑な書かれ方について無条件に絶賛する声も少なくない。円地の複雑な書かれ方について無条件に絶賛する声も少なくない。円地の複雑な書かれ方について無条件に絶賛する声も少なくない。円地の複雑な書かれ方について無条件に絶賛する声も少なくない。明知の『春琴抄』を連想させるだろう。

と歴史離れ」についての言説(「円地文子・人と作品」『昭和文学全家の素顔』)や、竹盛天雄の『なまみこ物語』における「歴史其儘説の方法に限界を感じていると述べた円地の発言(「円地文子」『作れないのである。ここでは、河盛好蔵との対談で森鷗外型の歴史小れないのである。ここでは、河盛好蔵との対談で森鷗外型の歴史小れないのである。ここでは、河盛好蔵との対談で森鷗外型の歴史小いないのである。ここでは、河盛好蔵との対談で森鷗外型の歴史小がは完全に自由な創作が可能だったわけではないだろう。つまり、世には、定子や道長といった実在した人物が登場しているため、偽だが、定子や道長といった実在した人物が登場しているため、偽

語』を考え直してみたい。 集第十二巻』)に拠りつつ、歴史小説という観点から『なまみこ物

では、Cを長では、日本周丘下り『強んたは残った』と探いたこと、Cを長では、Cを長では、日本周丘下り『強んたは残った』と探いた。『なまみに、歴史上の人物が登場することと同じほど、この方歴史離れ」を実践しようとしているのだ。『なまみこ物語』の歴史正でその方法を乗り越えて、円地は新しいもう一つの「歴史其儘と説の方法を非常に強く意識したものである。あえていうならば、こ説の方法を非常に強く意識したものである。あえていうならば、こ説の方法を非常に強く意識したものである。あえていうならば、これがとは言えないだろう。しかしその書かれ方は、鷗外型の歴史小説とは言えないだろう。しかしその書かれ方は、鷗外型の歴史小説を基準にすれば、歴史の論『なんと言言ない。

史小説としての『なまみこ物語』の新しさを明らかにしていきたい。鷗外の『堺事件』に対する大岡昇平の一連の批評を手掛かりに、歴ーこの点において発表では、山本周五郎の『樅ノ木は残った』と森





- L 常任委員会 委員会
- E 開会式 シンポジウム
- I 研究発表
- G 懇親会 貴重図書展観
- V 地下鉄5番出口

